



願 行 史

石 井 教 道

◆願行問題に就て◆

我が淨土教理史上(特に善導大師以後)重要な問題として取扱はれて居るものゝ中に願行といふ法相がある。尤も此の法相は淨土教に局つた特別な法相ではなく、寧ろ一般宗教の實踐規範として共通的なものである。彼の數倫學派に於て跛者と盲目者とを以て知目行足即ち神我自性に喩況し、その何れを缺ても目的を達する事はできぬといふて居るやうに、ある目的を達する爲には何うしても雁行せねばならぬものである。故に一般大乘佛教に於ても、佛になる爲には必ず四弘誓願と六度萬行との必要を説くのであつて、それを解行雙修とか開解立行などいふて居る。勿論我が淨土教としても別に珍しい問題ではないが然し、混沌として居つた願行思想がある外面的事情に依つて開發され、遂に分化的に深く研究されるやうになつてからは實に淨土教義研究項目中重大な地位を占むるやうになつた。然もその解釋の相違は正しく我が日本淨土教家の派を分ち岐を異にする根本主體をなして居ることを

看取した吾人は、此の問題に就て深い興味を持つやうになつたのである。

願行史を大體三期に分類することが出来ると思ふ。一は願行末分期二に願行分立期三に願行研究期である。

○願行末分期

導師以前の願行研究としては先づ經典の願行論を述べねばならぬが餘り長くなるから之を略し、且らく龍樹、天親、曇鸞の三師について略説するであらう。龍樹菩薩の易行品をみると、佛名を稱して不退轉に到ることを長々と明しながら、願に屬する言葉としては僅かに「或は信の方便易行を以て疾く阿惟越致地に至る者あり」とか、或は「是佛名を聞て信受するものは無上菩提を退せず」等といふ文字を稀に散見するに過ぎないのである。之を發展願行思想から逆觀して、信は安心なり稱佛は起行なり、願行具足して不退轉に到ることを明されたものとすることは出来るが、少くとも文の當面で左う判明したものではない。次に天親菩薩の淨土論を一瞥してみると、開卷劈頭に「世尊我一心」といふて後に五念門が明されてある。尤も此の一心は、眞家では信心であると確定されてあるが、淨土宗では之に安心の一心と起行の一心とを分けてみるから一概に一心は安心であると斷定も出来ぬが、更に長行釋に「云何か觀し云何か信心を生ずる」といふてある所もあるから、天親菩薩の上にも願行具足の往生を主張されたことは明了である。加之、後世多く論を講ずるものは五念門を以て起行の一偏に屬するや

うであるが(尤も、記主の西宗要聽書本には三心と五念と配當してある所もある)決して之は發展願行論の上から論ずるやうな起行の一端に屬すべきではない。故に懷感禪師は群疑論第二に身業禮拜門、口業念佛門、意業觀察門の三門を起行に當て、發願門と廻向門との二門を安心門に屬せしめてある。慧心の要集にもさうなつて居る。尤も本論の上では、作願門は奢摩他の行になつて居るから、直ちに安心門でいふ發願ではないが然し、同向の一門は安心に屬すべきである。即ち五念門は願行を一具にして組織した項目である。尤も宗學の上では之を起行に屬するものとする所から、願行の分科的研究の結果現はれた五種正行と同一のものとなし、之が開合を試みることもあるが、それは願行史からいふて聊か無理な所があるやうに思はれる。要するに天親菩薩の淨土教でも願行の分科的研究は十分でないこと云へる。後に曇鸞大師の論註について一言せむに、師は論註の下卷に三信三不信を明して居られる。眞宗は之を以て信心爲本の根柢となし、淨土宗は之を三心中の深心に配當し、延いて三心即一の故に三心具足した三信であると論じ、五念門を以て起行を明されたものとするから鸞師のうへにも行願の義が明了に示されてあること云へるが然し、それは願行の分科的研究が出来た上から逆觀しての解釋であつて、導師の以後の願行論と比較せば尙十分でないことはいふまでもない。

○願行分分期

往生極樂の目的を達する爲には願行具足でなければならぬといふ意味は十分にあつても、その分科

的組織的研究の完全でなかつたものを最も明了に分拆研究さされたのは全く導師である。何せ導師の時に左うした研究が盛むになつたかといふ理由に就ては、勿論、内面的理由として宗義研究の發展と云へばそれまで、あるが、此の運動の興る爲には外面的深い事情が伏在して居つたることを知らねばならぬ。その事情を証明にする爲には、可なり詳しい支那佛教史の説明を要するが、今は唯簡單に其筋書を記すに止めるであらう。

陳の天嘉四年に眞諦三藏が無着の攝論を譯出せられ、更にその論を註解した世親攝論等を翻譯されてから攝論の研究漸く盛むとなり、遂に攝論宗、寧ろ攝論學派の成立をみるやうになつたのである。而してその攝論學派に非常な勢力のあつたことは、それ以前、慧光律師に依つて大成樹立された地論宗の中に無明生法論と法性生法論と争つて居たのであつたが、新たに興つた攝論學派に無明生法論に加擔して龍虎相搏つ論争を爲したのであつた。それは陳隋の間に興つて佛教の統一を企てられた智者大師を起たしめた反面の一條件として確かに兩派の争ひが伏在して居たことは、彼の三大部を讀むとき屢々感せしめられる所があるが、その智者大師をして玄義九の上に「地論に南北二道あり、加ふるに彼攝大乘興つて各々自ら眞なりと謂ひ、互に相排斥して負處に墮せしむ」と慨かした點に依つても概況が伺はれる。近頃坐目宗大學長が起信論研究の中に、日支兩國に互りて茫々約二千年、常に佛教思想界の權威をなして來たあの起信論を産むに至つた原因は全く兩派の争ひにあつたと論じて居ら

れる程である事に依つても其勢力の侮ることのできぬものがあつた事を想像し得る。その攝論學派は管に獨り地論に對抗した許りではなく、更に他の説にも拮抗したその中に淨土教がある。即ち廬山の慧遠や北魏の曇鸞等が勸説された淨土教は人心の奥底深く沁み込むのみならず、鸞師が高調された稱名往生の易行は可なり廣く普及されたやうであつた。それはこの攝論學派が別時意説を建て、論難した事に依つて反證されて居る。所謂の別時意といふのは、素と無着菩薩が攝大乘論の中に、釋尊の教説を伺ふ心得として四意趣なるものを示された中に別時意趣といふのがある。論に依るに「唯發願して極樂世界に生ずることを得るといふ如きは別時意である」といふのである。それを梁譯 親攝論の第五等に一層詳しく説明して「唯佛名を稱して決定して無上正等覺菩提を得るといふのは、恰も一錢を以て直ちに千金を得たものとする如なものであつて、その實一錢も利子が積れば將來千金となるといふ意味に過ない。唯發願して生ぜむとするも亦同様である」といふてある。此文を楯に執て彼學派の人々は、淨土教は方便説であるといふ妄評を下したのであつた。導師の主義分に「久來この論を釋するもの誤つて觀經の稱名往生と一混して佛方便説となす」と云はれ、又、感師の群疑論第二に「攝論今日に至るまで百有餘年、諸徳咸く此論文をみて西方の淨業を修せず」といふて居られる所から考へると、彼等の主張も可なり古く、且つ知識階級の間にも相當勢力を有して居たことが推知される。然しながら、無明の暗雲は一時眞理の月を覆ふことなれど、無體即空の彼は遂に破壊さるべき運命を有

つてゐる。斯くしてその妄を闢かむとして最初の光りを挑げられたのは道綽禪師であつた。左うした反難の聲喧しきにも拘らず綽師は、自ら豆に依つて念佛の數を執り、物を與へて子供に稱名念佛せしめられたのであつた。安樂集卷上に攝論家に對し「表面は唯稱名に依つて往生が出来るやうになつて居るから左うも考へられるが、其實、過去宿習力の結果あらはれた稱名であるから決して別時意方便の説ではない」と辯明されてゐる。次に現はれて彼の説を根本的に覆へし、永久に斯かる妄評を下さぬやう最後の止めを刺れたのは導師であつた。導師の説を述べる前に一言せねばならぬのは弘法寺の迦才についてである。何せかといふに、左ういふ根本的説明の主體が兩師全く同一であるから、何れが先きに言ひ出されたかといふことの決定は、實にこの願行史の重大問題になるからである。迦才の出を年代は判明せぬが、其著淨土論の中に近う道綽禪師ありて安樂集一卷を作ると云ふてあるから綽師の後であることが知れ、又、唐貞觀二十二年に死むた姚婆の記事をなして居るからそれ以後に亡なつた人である事の見當はつくが、導師との前後については知ることが出来ぬのを残念に思ふ。然しながら、綽師臨終の三罪を指摘した善導の事蹟や、今又この攝論家に對する辯明の詳細な點などから稽へて吾人は、少くとも攝論家への答辯は迦才よりも先に發表されたものとして述べたいのである。

導師は立義分第五章に會遍別意時の一段を設けて詳細に説明せられた其要點を撮記するに、先づ初めに攝論の文を出し、次に華嚴法華の稱佛の文を擧げて其同異を辯じ、更に攝論の唯願別時意の文に

依つて觀經の十聲稱佛も亦同じく別時意であるといふ彼の説を出し、次に之に反對する阿彌陀經の稱佛往生の文を照應せしめ、たとひ攝論の文が攝論家の考へるやうな意味としても、論に依つて經を否定し、人師に依つて如來を難するは甚だ當を得ざる妄言であるから決してそんな顛倒の見に陥つてはならぬと誠勗して居られる。加之、攝論の眞意は決して經の意味と背反するものではなく、全然一致するものである。何となれば、凡そ往生極樂の必須要件としては願行具足にある。願孤行孤は何れも正説ではない。故に攝論では唯願又は唯稱と簡別の唯の字が冠してある。然るに觀經等の稱佛は願行具足であると論じ、茲に有名な「言南無者即是歸命亦發願廻向之義言阿彌陀佛者即是其行」の解釋をせられたのである。論は願行不具の故に別時意と貶し、經は願行具足の故に往生を許容す、經論相ひ依つて義益々明了であるといふのが導師の辯明であつた。此の證明一たび出で、以後、迦才の淨土論卷中、慈恩の西方要決卷一、懷感の群疑論第二等何れも此の説を證認信奉して居るのである。導師はその結果ならん、諸處に於て安心起行の分科的組織的研究を詳細にして居られる。散善義の三心の説明、又、二行の詳解は到底之を以前の論師に見ることは出来ぬ。往生禮讚には、往生極樂の必須要件として安心起行作業の項目的制定までして居られる。此の下ではなほ起行の下に五念門を引かれたが散善義の上では五程正行を別に組織されたのである。何せ五念門の外に五程正行を建てられたかといふ問題に就ては、曾て鹿溪第二號に辯じたから再び茲に贅言を費さぬであらうが、特に願行史から之

をみるこそそれが當然である事が判る。曩にも一言したやうに、五念門は願行を總括した組織である。然るに、願行の分科的研究を創設された導師としては何うしても起行面のもの許りを以て組織し直す必要があつた。加之、五念門では稱名念佛の義十分に顯れぬ。茲に於て稱名主義の導師は稱名念佛を中心とした起行の組織を必要とせられたのである。尙導師の別時意論について一言せねばならぬ事は導師は願行具足の義を窮論して六字名號の法體の上に之を求められたのである。若し然らば、念多寶佛を以て別時意とする攝論の文が解し難い事となる。何となれば、多寶佛の法體の上にも願行具足して居るべき筈であるからである。此に依つて導師は成佛教と往生教とを分別し「正報は期し難ければ一行精しと雖も未だ尅せず。依報は求め易し故に一願の心のみ未だ入らず」と通釋せられたのである。勿論此は多寶佛の名を稱する上に就て成佛別時意をいふのであつて、本願念佛の上には少くとも文の上ではかゝつて居らぬが、前後の文勢から結論すると、本願念佛も成佛の爲には別時意とせられるやうにみられぬでもない。此點は後世日本淨土教の中に、往生即成佛を論じたり、本願念佛を稱ふれば萬行備さに具はるものであるとする説などとは聊か違ふ所があるやうに思はれる。然し此は解釋のしやうに依つては何でも解釋ができるから一概には云へぬ。兎に角、導師に依つて創設された願行分科説は、實に我が日本淨土教に來りて頗る複雑な問題と化し、茲に諸程敎派の別を生ずるやうになつたのである。(未完)